

別子鉱山史の留意点－追加1

令和3年7月11日 坪井利一郎

白井智子の「別子銅山古文書に見る明治初期の生野銀山と別子銅山の相互関係－お雇い外国人コワニエと広瀬幸平の交流を通して」(仏蘭西学研究39号 2013年)を読む。その中に何点か新事実が掲載されていた。

白水丸とルイ・ラロック

広瀬幸平の「半世物語」には、ルイ・ラロックが和船を嫌ったので汽船を購入したと記述しているが、白水丸を購入したのはコワニエに別子銅山を視察に来てもらうためであった。広瀬は、フランス人技師のルイ・ラロックとコワニエを記憶間違いしたままで書いた。

コワニエの別子銅山視察は多忙のために延び延びになっていたが、ついに実現する。

明治5年 9月 5日 工部省へコワニエの別子銅山への派遣視察を懇請する。

明治5年 10月 8日 聴許となる。

明治5年 11月 イギリスの汽船を購入して白水丸と命名する。

明治6年 1月 27日 広瀬は生野に出張。コワニエに直接要請のため。

明治6年 6月 3日 生野出発

住友友親・広瀬幸平が白水丸で飾磨港で迎えに来る。

6月 4日 新居浜港に着く

6月 13日 新居浜港から飾磨港、姫路から生野に帰山する。

増田芳蔵のフランス留学

別子鉱山目論見書の実施に当たって、塩野門之助と増田芳蔵をフランスに留学させた。塩野はルイ・ラロックの通訳をしたからフランス語ができるからであった。

広瀬が明治元年9月～明治2年1月まで生野銀山に出司した後に、岡田梅蔵と増田芳蔵を生野鉱山学校に送り、コワニエから鉱山学とフランス語を学ばせる。増田はフランスを学んでいたからフランスへの留学生に選ばれた。

火薬のわが国での初使用

広瀬は生野銀山出司中にコワニエから火薬採掘法を学んだ。別子銅山に帰山し、生野にも負けじと近代化したいとの強い意志から第一通洞開削で火薬を使用したのは、厳密に云うと「我が国の民間鉱山で最初に火薬を使用した」となる。コワニエは生野銀山で日本で初めて火薬を使用している。広瀬は明治4年4月に再び生野銀山への出司が命令され、6月2日に着任する。8月頃になるとコワニエと懇意になる。コワニエの別子視察へと展開。

別子鉱山史の留意点—追加2

令和3年8月1日 坪井利一郎

鬼殺し

小足谷醸造所で造られた酒の銘柄は「イゲタ正宗」、別名「鬼殺し」。昭和44年刊行の「旧別子案内」に「イゲタ正宗」と出ていて、以後この記述が続く。明治43年刊行の「雑誌・遠鳴30号」では、新井琴次郎が「井桁正宗」と記述している。(井桁はw i g e t aなので、カタカナ表記ではキゲタ。キゲタ正宗となる。) 新井琴次郎の戦前の遺稿を子息が平成19年に本にした「紙碑」には、「鬼殺し」が出て来る。昭和16年刊行の別子開坑二百五十年史話では「銅山正宗」と記述している。

別名の「鬼殺し」は、この酒を飲むと鬼の様に気の荒い坑夫も酔いつぶれておとなしくなるところから、誰言うもなく「鬼殺し」と言われてきたと説明される。現代教養文庫「日本を知る小辞典3衣食住」(社会思想社)に、「昔は辛口の酒が喜ばれた。辛すぎて『鬼殺し』の異名がついたとは方々で聞く話だ。」とある。辛口の酒を言っていたと考えられる。

小足谷で吟醸酒を造る必要はなく、少しでも多く酒を造ろうとすると、米の精米度も低くなり、たんぱく質に起因するフーゼル油分が高くなって、飲むと頭にこたえた。

現在でも高山市や松本市に「鬼殺し」の銘柄の清酒が販売されている。

露頭線

別子開坑二百五十年史話では、「尾根を越えて、昼なお暗い中を二三町南に下って露頭らしいものを見つけ」とある。これを元に尾根を南に少し下った箇所で見つけた話として色々と書きつづられる。土佐街道も荒唐無稽に現況に合わすから現況認識がややこしくなる。

銅山越え—銅山峰—西山の稜線の登山道と露頭線は一枚岩で交差しているの、西条藩領内からも露頭線が天領に続いているのは一目瞭然である。尾根から南は昼なお暗い密林状と記述するが、銅山峰のツガザクラが80万年前の氷河期から生き延びて来ているので、尾根は灌木が生えてはいるがパッドレス状である。立川銅山から露頭線を辿って尾根まで来ると、更に続いているのは明白である。また、パッドレス状は、平野からも識別が付き、雪形にも出るので山相からも知ることができていたはずである。

大和間符横の大露頭が登山道の傍らに露出しているので、視覚的にここを表現して露頭発見譚にしている。西条藩・天領国境の露頭線を見ていないか、見ていても露頭と理解できないので、大露頭で書き始めている。

大露頭下に、這って行く坑道跡があるのに、大露頭での試し掘りでなく、後の歓喜間符の箇所での試し掘りは、2点調査を暗示している。

現在も大露頭にはヘビノネゴザの羊歯か生息している。金属探査の指標植物なのに、これに触れないのは、この方面の知識がなかったからであろう。

南蛮吹き

住友寿済が堺の異国人に学んで銀抜き法を考案したとの伝えは、天正19年(1591)であった。生野の「銀山旧記」には、寛永9年(1632)に多田銀山から来た者が、「かたけ吹き」をするとある。かたけ吹き＝南蛮吹きで、銅の中に含まれている銀を分離精錬する一連の工程をさす。なお、「かたけ」は地銘か人名かも不明。

石見銀山は、博多の商人の神屋寿禎の「銀山旧記」によると大永6年(1526)に発見された。そして翌年に開発される。灰吹き法は発見7年後の天2年(1533)と伝えられている。

佐渡に灰吹き法が導入されたのは天正11年(1542)で、鶴子銀山が成立する。佐渡金銀山を治めた佐渡奉行所は慶長9年(1604)に設置され、復元された奉行所の床下からは、貴鉛が発掘されている。

日本海の灰吹き法の伝播は、博多→石見→佐渡が考えられる。

大阪エリアの灰吹き法の南蛮絞りは、堺→大坂の住友の延長に多田→生野があるのか。堺を起点としての別ルートなのか。5年～15年の差は何かを物語るのか、注目点である。

生野の銀山旧記の注

かたけ吹き：慶長年間(1596～1614)に伝わった「南蛮吹き」によって、多田銀山は第二の盛期を迎えた。かたけ吹きは銀を含む粗銅から、南蛮吹き・南蛮絞りによって貴鉛を絞り出し、その後、灰吹きによって銀を取る一連の事。南蛮吹き法は、粗銅に含まれる銀を抽出するとともに、不純物であるヒ素やアンチモン等も取り除き銅の品位を上げることができた。

背負子

別子山型の背負子は、荷を乗せる箇所は着脱式になっている。T字状に作り縄で結束して止めた。初期においては、木の幹と枝部を一体加工して作成していた。

仲持ちは、立って休む時に背負子下に頭部がT字状になった杖を入れて支えた。そのために背負子の下の横棒に切りこみを設け、杖の頭部を切りこみに入れていた。

石ケ休み場では、石積みのベンチに腰掛けて、背負子の脚をベンチに乗せて休んだ。石見銀山には「もたれ石」があり、その石にもたれて背負子をもたれ石の上に乗せて休んだ。

別子

別子開坑二百五十年史話に、景行天皇の第12皇子の武国凝別命が、新居、宇摩、周桑郡を治め、その子孫の加禰古乃別君、龍古別君、意伊古別君が統治するとある。龍古別君は龍河神社の祭神、意伊古別君は新高神社の祭神として祀られ、尊い縁故から「ワケノコ」と呼ばれていたが、後に音読みして「ベッシ」となり、別子山村に名を留める。

武国凝別命は西条市の伊曾乃神社の祭神として祀られている。なお、景行天皇の古墳は奈良盆地を見下ろすように、桜井市の山野辺の道の傍らにある。